

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」 (マルコ5:41)

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第36号

2020年7月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65
日本聖公会管区事務所気付
正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL 03-5228-3171

発行責任者:篠田 茜

バーバラ・クレメンティン・ハリス主教の逝去にあたり

司祭 マリア・グレイス 笹森田鶴(東京教区)



バーバラ・ハリス主教
(写真: 米国聖公会マサチューセツ教区のツイッターより)

今年3月13日、米国マサチューセッツにてバーバラ・C・ハリス主教が逝去されました。89歳でした。この訃報に接した時、大きな衝撃を感じたと同時に、この方と少しの間でも同じ時代を生きることができた幸せと感謝の思いで一杯になりました。

ハリス主教は1930年生まれ。アングリカン・コミュニオンにおいて歴史上はじめて女性として主教に按手された方です。1979年に執事に、翌年に司祭に按手され、1988年9月にマサチューセッツ教区の補佐主教として選出されます。そして1989年2月11日、8千人の参列者に囲まれ、60名の主教たちによって手を置かれ、主教按手を受けられました。

ハリス主教はさまざまなことをその小さな肩に背負っていました。離婚歴があることや神学校を卒業していないこと、牧会経験が8年弱など、主教選出において指摘されていた他、何よりも人種差別と性差別によっていやがらせや脅迫すらも受けていました。ご自宅の電話番号を二度も変えなければならなかったことなどはそのような状況の中で起こっていたことです。

一方で、人種差別や性差別、性的指向による差別の撤廃や神の正義と平和の実現のために語り続けるハリス主教は、次々と世界中から説教者として、またその存在に直接会いたいと願う人びとからの願いによって招聘され、各地を精力的に訪問していました。

ある時、オーストラリア聖公会にハリス主教が招聘されているという情報を当時の東京教区の竹田真主教がキャッチし、「ついでに日本に寄ってもらえないかと頼んだら」快諾してくださったというのです。そして1990年7月、ハリス主教の来日が実現しました。

竹田主教はハリス主教を最大級のおもてなしで東京教区に迎え、ハリス主教は滞在中各教会などでの講演会、主日礼拝での説教をされました。さらに聖公会神学院ではハリス主教と竹田主教との共同司式による聖餐式がささげられることになりました。この出来事は、日本聖公会がまだ女性の司祭按手を認めていなかった時期の、賛成、反対の意見が際立ち非常に強い緊張関係があった状況の中での、歴史的な出来事でした。わたしは竹田主教に声をかけていただき、ハリス主教滞在中の訪問先の行き帰りなどのアテンドをさせてもらい、毎日一緒に過ごす貴重で幸せな時を与えられて過ごしていました。

ある時、ハリス主教がおっしゃいました。「わたしは常に最高の職務を果たすことができるようにと努め、そして祈っています。アングリカン・コミュニオンではじめての女性の主教として自分が注目されていることをよく分かっているからです。そして男性のひとりとしてではなく、アフリカ系の、そして女性の主教としてありたいのです。もしわたしが何か間違ったことをしてしまったら、だから女性が主教になったからと必ず言われることでしょう。男性ならばあの方が主教になったからと言われるだけですが。わたしには世界中のこれからキリストの弟子として、そして聖職として働こうとするすべての女性たちの道への可能性にも責任があります。だからこそ、常に、わたしができる最高の職務を果たそうとしているのですよ。」決して傲慢からの思いではない、繊細でそして心温かいこの言葉は、今でも忘れられないひとりの聖職としての生き方として、そして励ましとしてわたしの心に刻まれています。

人の痛みに寄り添い、そして毅然としてまっすぐにキリストの使命のためにその生涯を費やされたバーバラ・ハリス主教。ありがとうございました。必ずまたお会いします。

誰もが安心できる教会に—企業や行政の取り組みに学ぶ

クララ 篠田茜(大阪教区)



先日『法律家が教える LGBT フレンドリーな職場づくりガイド』*という本を読みました。「LGBT とアライのための法律家ネットワーク(LLAN)」に属する実務法律家、LGBT施策に取り組んでいる企業の人事担当者だった方や現役の担当者が編著者です。

行政でも(同性パートナーシップ制度など)、国政でも(差別解消法案や婚姻の平等法案の提出)、企業でも(2017年の経団連の報告書「ダイバーシティ・インクルージョン社会の実現に向けて」、2019年に成立したパワハラ防止法に基づくLGBT社員に対するハラスメント防止の義務付け—大企業では2020年6月施行、中小企業では2022年4月施行予定)、

具体的に様々な面から LGBT 支援の取り組みが始まっています。

しかし実際に進めていくときには、社内アンケートなどに、「なぜ今 LGBT?」「先に進めるべきは女性活躍推進なのでは」、また「余計なことをしないでほしい」「そっとしておいたほうがいいのか」という意見が、当事者でない人からも当事者からもでることがあるといます。それに対して、「企業は誰もが働きやすい場であることにより、新たな人材の登用や定着、顧客の定着につながり、収益もさることながら、生きやすい社会に貢献することができる、その点から女性活躍、障がい者雇用、多様な働き方、LGBT など社員がもつ違いのひとつである」「ひとつのマイノリティの属性を優先するのではなくバランスよく取り組むことが必要性である」と伝えるということです。

「アライ」とは英語で仲間や支援者、同盟を意味する“Ally”ですが、性的マイノリティについて理解し活動をともにする仲間のことを指しています(2016年に『タリタ・クム』のコラム「わたしの瞳に映る景色」をまとめたコラム集の17ページにもあります)。本書では社内でこのアライを増やす方法が紹介されています。ピンバッジなどのアライグッズをつけることで、「この人はアライだ」とわかり、アライのいる企業では明らかに LGBT である社員の勤続意欲が高く、また身近に LGBT の社員がいることを認識している職場では、LGBT に対するハラスメントがあることを感じる他の社員の割合も高いのです。LGBT 施策は、カミングアウトする人を増やすことが目的なのではなく、働きやすい場、性的マイノリティであることでエネルギーを消耗しない場の整備をハード、ソフト両面で整えていくことです。それがひいては誰にとっても働きやすい場になることにつながると考えています。

振り返って教会はどうでしょうか。自分も含めてですが、「誰もが神の前では等しくされている」ことをキリスト者として体現できているか、少なくともそうしようという努力ができているでしょうか。その輪を広げる努力ができているでしょうか。行政や企業の取り組みから学ぶことはたくさんあるかもしれません。

LGBT に関する参考文献(企業の実務担当者向けですが)やこれまでの裁判例も掲載されているこの本、お勧めします。

*『法律家が教える LGBT フレンドリーな職場づくりガイド 従業員が安心して実力を発揮できる職場をつくるために』法研 2019年12月発行

■■■■■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑱ ■■■■■

インターセクショナルリティ(intersectionality)

司祭 アンブロージア 後藤香織(中部教区)

2020年5月25日に米中西部ミネソタ州
ミネアポリス近郊で、アフリカ系アメリカ

人の黒人男性ジョージ・フロイドさんが白人警察官に首を膝で圧迫されて死亡した事

件への抗議活動によって、「Black Lives Matter(黒人の命は大切、以下 BLM)」運動が世界各地に広がっています。

権利獲得の意識が低い日本では、残念ながら BLM のデモに参加することがコロナの感染拡大につながるのではという否定的な懸念の声が多く聞かれました。コロナに感染して死ぬ可能性よりも、人権を踏みこじられて生きる権利を奪われる可能性が高い、そんなデモ参加者の想いに、少しでも共感出来るように関心を持ち続けたいと思います。

どうして今回、BLM 運動を冒頭に持ってきたのかというと、トレイヴオン・マーティンの射殺事件で 2013 年から湧き上がった BLM 運動は、「ブラック・フェミニスト」と自認するアフリカ系女性 3 人(そのうち 2 人は自分を「クィア」であると表明する、クィア活動家)によって始められた運動であり、何よりも LGBT+ を取り巻くのと同じ、「差別」と「偏見」から生じる課題だからです。

これまで黒人差別への抗議運動は、性差別やジェンダーの不平等には目を向けられず、人種的不平等にのみ焦点を当てて行われていました。その背景には家庭を重要視する、キリスト教的な倫理観があり、LGBT+ への眼差しはむしろ敵対的でした。

また、LGBT+ の解放運動も、プエルトリカン・アメリカンやアフリカン・アメリカンのトランス女性たちから始まったにもかかわらず、彼女たちが正当に評価されたのは 20 世紀も終わる頃でした。

しかし BLM 運動は、ウーマニズム

womanism(フェミニズム運動が主に白人の女性によって担われ、性差別だけを問題としたのに対し、黒人の女性が中心になって性差別、階級差別、人種差別を併せ持った問題としてフェミニズムを捉え直そうという考え)とクィア思想によって支えられた運動です。

ジョージ・フロイドさん殺害の抗議行動は、現在も続いていて、とても息の長い運動として広がっています。それはこの BLM 運動の参加者たちが、実生活に根差した様々な困難を抱えている人たちであり、その切実さから黒人だけではなく白人やその他のマイノリティの人々にも権利獲得の必要性が共感されているからでしょう。さまざまな差別や不平等の課題が、あらゆる方向から尽きることなく薪をくべて、この抗議の火は燃え続けているのです。

これまでの差別・不平等への抗議運動は、どうしても「わたし」への差別への抗議から抜け出すことが出来ませんでした。例えば、黒人の男性であることと、黒人の女性であることの抑圧の質は違います。黒人女性であることは、黒人への差別も、女性への差別もともに受けることになるからです。

この黒人の女性の、様々な差別が複雑に重なりあって抑圧されている状態を説明する言葉として「インターセクショナルリティ Intersectionality (交差性)」という概念が使われるようになりました。

わたしたちが持っている差別意識は、人種差別や性差別だけでなく、さらに障害の有無や障害の状態、年齢や容姿、教育や階級による差別などもそこに重ねられます。世界では宗教や民族や文化の違いも交差し

ます。一人の人への抑圧は、様々なかたちで交差し、複数のカテゴリーから抑圧を受ける可能性があるのです。このような差別のインターセクショナルな構造をしっかりと見据えて、そもそもわたしたちは互いに

違う、ユニークな存在であることを理解しながら、複雑に交差する差別意識を克服して、互いに共感できる幅を広げてゆく可能性を、BLM 運動の中から指し示されたいと思います。



大韓聖公会の女性たちニュース

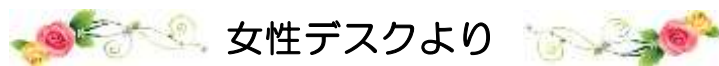
司祭 フィデス 金善姫(中部教区)

大韓聖公会女性局と女性宣教センターが Safe Church(セーフチャーチ)プロジェクトとして共同制作した動画、「皆が安全な教会の為、一度は考えてみる私達の物語—私だけがそうなの？」が YouTube で公開されています。性認知の感受性の向上のため制作・配信しています。6月よりエピソード4つが公開されています。内容は、①10代の若者たち、②2次被害について、③不法サイト、④いやがらせの電話を受けて。

韓国史上最悪の性犯罪事件「Telegram(テレグラム)N 番部屋事件」、#MeToo(ミートゥー)ムーブメント、巨大児童ポルノサイト Dark Web(ダークウェブ)の運営者が韓国人であることなど様々な性暴力事件が知られるようになり、教会でも以前より継続してきた「ジェンダー暴力と戦う16日間キャンペーン」と連携して様々な防止活動を行っています。

追記：韓国の朴元淳(パク・ウォンスン)ソウル市長が7月10日、市内の山中で遺体として発見され、その後、韓国警察により自殺と断定されました。元秘書女性から「2017年からセクハラ被害を受けてきた」と告訴され2日後に亡くなりました。

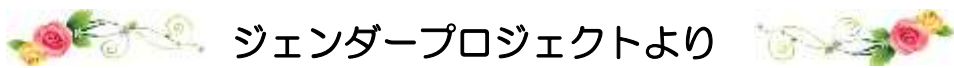
朴元淳氏は人権弁護士出身で、1993年「ソウル大学教授による助手へのセクハラ事件」を通して韓国で初めてセクハラ被害が認められた契機をつくり、韓国社会に「セクハラ」の概念を普及させ支持を受けていただけに、今回の出来事は多くの人に衝撃を与えています。



女性デスクより

- 新型コロナウイルス感染拡大により、わたしたちの働きもさまざまな影響を受けています。9月には女性の教役者を中心とした黙想会を実施しようと企画しておりましたが、残念ながら中止として、後の機会に譲ることにしました。
- 6月に予定されていた第65(定期)総会が10月27日～29日に延期されました。「2022 30(2022年までに意思決定機関に占める女性の比率を30%に)」の目標年が近づいていますので、この管区総会と11月の各教区教区会に先立ち、新しいポスターを制作、配布して、女性が数多く選出されるように強くアピールしていきたいと思えます。

■また、秋～冬のことになりますが、今年も11月25日から12月10日までの「ジェンダー暴力と闘う16日間キャンペーン」に参加して、ジェンダーに起因する暴力(性差別と結びついた主に女性と少女に対する暴力)を根絶するための取り組みをするよう全国に呼びかける予定です。今年はキャンペーン期間中の代祷のお願いのほか、昨年同様東京教区にご協力いただき「女性に対する暴力の根絶を求めて祈る」礼拝をささげるとともに、全国の教会でもこの礼拝が守られるように祈りの輪をひろげていきたいと考えています。



ジェンダープロジェクトより

- 新型コロナウイルスによる3か月に及ぶ自粛生活の後もまた次の波がやってきています。家庭内暴力の増加、貧困の格差の広がりに加え、社会が相互監視状態のような、ますます不寛容な状況になりつつあることに怖さを覚えます。誰もが大切にされる存在であることにぶれない気持ちを持ち続けていきたいです。
- 今回、『タリタ・クム』の2017年27号から2019年33号の間で5回に渡り連載した北川規美子さんの「婦人伝道師シリーズ」を『日本聖公会の働き人—女性たちの後ろ姿—』と題してブックレットにまとめ、同封いたしました。ご本人の体験も交えた婦人伝道師の姿をぜひ通してお読みいただき、またご活用ください。
- 管区総会が10月に延期されましたが、次期総会期からジェンダープロジェクトの代表が篠田茜から金善姫司祭(中部教区)に交代します。また新たなメンバーとして永谷亮司祭(北海道教区)、金子登美江さん(北関東教区)が加わる予定です。新しい視点でジェンダーの課題や情報を提供していければと思います。引き続き、どうぞよろしくごお願い申し上げます。

女性とは？

ジェンダープロジェクトでは、「女性」とはあらゆる社会構造の中で、立場が弱くされている人たちの一つのグループであるという考え方をしています。性の多様化の中、「女性」という表現自体が問題視されることもあります。タリタ・クムで用いる「女性」という表現は、「女性」の視点を大切にしながらも、男女二分法にとどまった性別用語としてのみ理解されるより、包括的な意味で理解される事を意図しています。

正義と平和委員会

ジェンダープロジェクトとは？

教会におけるジェンダー課題の共有と克服のために、すべての人が尊重されるネットワーク作りをめざして活動しています。機関紙としてのニュースレター「タリタ・クム」の発行(年3～4回)、学習会の開催、出前ワークショップの実施なども行っています。一人でも多くの人が、ジェンダーの課題に関心を持ってくださり、共に考えていける場をつくっていきたく願っています。

タリタ・クムとは？

「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会堂長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとって、イエスさまが言われた言葉です(マルコ 5:41)。今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかつた女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神さまの祝福によって主の栄光をあらわすために、より生き生きと用いられますようにという祈りと願いをこめて名付けました。